

の

滝沢村

日

穴口在

常

高橋克彦

高橋克彦



玉

日本国

子

東北地方

魔

岩手県

人

岩手郡

Days of TAMAGOMAZIN

中央公論社

玉子の魔人の日常

高橋克彦

Days of TAMAGOMAZIN

高橋克彦（たかはし かつひこ）

1947年岩手県盛岡市生まれ。早稲田大学卒。
1983年『写楽殺人事件』で第29回江戸川乱歩賞、1986年『総門谷』で第7回吉川英治文学新人賞、1987年『北斎殺人事件』で第40回日本推理作家協会賞を受賞。主著に『ドールズ』『パンドラ・ケース』『竜の枢』『広重殺人事件』『浮世絵ミステリーゾーン』などがある。

玉子魔人の日常

一九八九年一〇月一〇日 初版印刷
一九八九年一〇月二〇日 初版発行

著者 高橋克彦

発行者 鳴中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八七
振替 東京二二三四

©1989 CHUOKORON-SHA, INC., Printed in Japan

ISBN4-12-001875-X

目次

玉子魔人

苛立ち解消法にきます

11

快食・快眠・快便

13

只今ご臍肩

15

妻への詫び状

16

祖母の作戦

18

ケンカできない理由

19

現住所にいたくない

23

私の貧乏時代

26

過去への扉

27

戻り足

38

所有欲

40

私の手料理

42

申し訳ない

44

また出てきてくれよ 45

いきつけの床屋さん 47

乱歩と私 48

予知能力 52

懐かしきおばさん 55

昔はよかった 58

玉子魔人 61

出会いと別れ

65

マイ・スクラップ・ブック 67

テレビ・ロマンチズム 81

テレビ・センチメンタリズム 85

好きな言葉 嫌いな言葉 89

三島由紀夫について 90

食糧危機と子供たち 93

仕事に満足して欲しい 96

心の復権 100

ミュシャがやってくる 105

出会いと別れ 108

もつと素直になりなさい 112

素敵な人を捜しなさい 115

自分を持つことのむずかしさ 121

国家秘密法の恐ろしさ 123

好きな女性 嫌いな女性 125

競馬音痴 131

反論になるけれど…… 134

怪談映画狂 138

海外ミステリーベスト50 142

十年書くのをやめなさい

柱時計 159

小説はむずかしい 161

おかしい毎日 164

処女作品 167

涙がでてきちゃったよ 168

ミステリーを書き始めた頃 173

ワープロ地獄 174

構成の立て方 177

個人的なことですが 184

龍とはなんだったのか 187

東北と私 告白すると…… 197

私の名勝負 200

この本搜しています 205

節目のテレホンカード 207

十年書くのをやめなさい 210

北斎を訪ねて小布施

無意味なアイデア 219

このたびの旅 222

盛岡・恩流寺 224

出会いのある町 225

北斎を訪ねて小布施 228

取材の長短 233

二つの宿 235

道との遭遇 243

小布施・松本 浮世絵の旅 246

東北の祭り 255

旅は電車で 257

私の写楽

私の好きな浮世絵 263

時代を演出した男たち 267

情報メディアとしての浮世絵 272

楽しい写楽の謎 276

幽霊絵の世界 279

北斎の大きさ 285

江戸絵から新聞錦絵へ 288

春本の値段 290

浮世絵とはなにか 297

浮世絵に見る検閲制度 302

松の廊下と浮世絵 304

私の写楽 310

松本幸四郎の肴屋五郎兵衛 328

浮世絵は面白い 330

明治の浮世絵——芳幾を中心に 337

芳年の実像 344

あとがき 350

玉子魔人の日常

装
幀
龟
海
昌
次

玉子魔人

苛立ち解消法にききます

自分に自信をつけさせてくれるクスリ。そんなものが現実であれば有難いのだが、これだけクスリが氾濫している時代に、どうもそればかりはないようだ（ここでいう自信とは、生き方の問題であって、決して精力剤のたぐいではない）。

昔は確かにあったような気がする。子供の頃のぼくにとって「少年探偵団」の主題歌がそれだ。夕方からの買物や友達の家遊びに行つた帰りの夜道、必ずこの歌を口ずさみながら家路を急いだ。ぼ、ぼ、ぼくらは少年探偵団、勇気凛々瑠璃の色、望みに燃える呼び声は、朝焼け空にこだまする——大きく声を張りあげていると、夜道を一人で歩いている恐怖感からすっかり解放されていく。自分が本当の探偵になつたようで、むしろ幽霊や怪しい人物にこちらから出会いたいような気分だった。これほど効果のあるクスリはない。

大学時代には高倉健の映画があつた。試験や将来への不安でズタズタになっているときでも「唐獅子牡丹」を見ると、学歴がなんだ、一流会社がなんだ、という意地と自信が湧いてきた。演歌に魅かれたのも同じ頃だ。水前寺清子の、東京が駄目なら大阪があるさ、大阪が駄目なら——というフレーズが今も耳に残つて離れない。卒業間近になつてもまったく就職のあてのない人間同士で、何度かこの歌を唄いながら酒をのんだ。ヤケではない。広い世間には自分たちのことを認めてくれそうな人間

が一人くらいいるような気がしたのである。あれも一種の自信回復剤だろう。

ところでぼくは今かなり苦しんでいる。仕事が思うようにはかどらないからだ。予定ではとくに脱稿しているはずの小説が半分も進んでいない。必死になってやっているつもりだが、どうもペースが掴みきれない。欠点ばかりがやたらと目につき、書いては破り、前に戻っては削りの連続である。こんな時にこそ自信をつけさせてくれる強烈なクスリがほしい。まさか今更「少年探偵団」でもない。その程度ではおさまらないほど重症なのだ。

自信を回復させるクスリはそんな具合でまだ手にいれていないが、このお陰で少なくとも苛立ちを鎮めるクスリだけはなんとか見つけることができた。なにしろ朝から晩までこの不愉快な苛立ちと付き合い続けている。どこかで解消しないと体が保たない。

クスリとは野鳥の声を録音したテープである。疲れた時エンドレスで流していると実に爽やかで気分がいい。何かで目にしたが実際にどこかの病院でこの方法を採用しているそうだ。入院室に流して患者さんの精神状態を平静に保つために医師が考えたらしい。もしかすると精神病院だったかもしれないが……場所はともかく、これは医者への保証付きの苛立ちを押さえる絶好のクスリなのである。

車の運転ができたなら、好きな時に山や海に行って気分転換もはかれるだろうが、免許もなく、スポーツもしないぼくにとって苛立ち解消法はせいぜいこんなものしかない。しかし、こんなもので苛立ちを鎮めねばならぬほどぼくの生活は暗くて悲惨なのだ。それに気がついてますます苛立ちが募ってきた。窓から明るい外を眺めては溜息ばかりついている。

快食・快眠・快便

快食、快眠の方なら、これは自慢できる。ぼくは昔から良く食べ、良く眠る子供だった。それが今も続いている、身長割には体重が多すぎるし、睡眠時間も最低八時間はとらないと一日中調子が悪い。

ところが快便となると、とたんに怪しくなってくる。特に便秘は日常茶飯事で、言うなれば怪便に近い。馴れているので、今はどうということもないが、やはり健康には良くないのだろう。この頃は二、三日便意がないとつとめて薬を飲むように気をつけている。だが、それでも効果のないことが、かつて一度だけあった。

高校の時だから、二十年も昔の話だ。

ぼくは従兄と二人で欧州旅行に出かけた。今なら別に驚きもしないが、当時は外国旅行をするという事に相当の勇気が必要とした。もしかすると、生きて再び故国の土を踏めないかもしれない——大仰に言う、そんな気持が送る側と送られる側にあった。だから、出発前の何日かの緊張感は大変なものである。当然、便意などどこかに消しとんでいる。

その上、旅程もまづかった。ソ連經由のコースを選んだので、最初の何日かは船旅である。ぼくは船に弱い。すぐに酔ってしまう。吐き氣と闘いながら、便意などあるはずもない。この時点で既に八

日が過ぎていた。勿論薬は飲んだが、一向に効きめもなく、船を降り、汽車、飛行機と乗り継ぎ、モスクワのホテルに投宿した時は、なんと便秘が始まって、実に十一日目に到達していたのである。

船に揺られ、汽車に揺られ、ここで初めて揺れない、それも和式の便器に巡り合った。

ぼくは決意した。汽車の旅はまだ続く。便意があろうとなかろうと、この際問題ではない。ここですませない、チャンスはいつやってくるか分からない。今は便器に立ち向うという真摯な姿勢こそが大切なのである。

ぼくは泣いた。苦悶した。喚いた。中座して体操をしたりもした。肛門は脹れあがり、額からは汗がしたたり落ち、死闘二時間。遂に至福の瞬間が訪れた。

極度の便秘の場合、普通は山羊の糞のように小さくポロポロになったものが出る。だがこれは違う。肛門が開きつ放しで、ズズズと永遠に吐き出し続ける。突然、ガチッと、便器が金属とでも触れあうような鈍い音がして、いくらふんばってみても、ぼくの便はそれ以上出ていこうともしない。

これは信じてもらえないに違いない。

下を見ると、ぼくの便は、尻から直立不動の姿勢を保ち、便器の底につかえていたのである。ぼくは慌てて尻を持ちあげた。放出感再び始まる。つかえる度に、尻を高くする。

ガラン、と激しい音たてて、ぼくの便は便器に横たわった。直径七センチ長さ三十センチは優にあったと思う。十一日間の食事が美しい棒状に積み重ねられている。

ぼくは感動した。汚ないという意識はまるでない。指先で、その横たわっているものを突ついてみた。異常に固い。思わずぼくはトイレットペーパーで端を包むと、そっと持ちあげてみた。予測した通り、警棒のように固く、焦茶色のそれは、途中で折れることなく掌の中にスックと雄々しく立ちあがったのである。水分を失った便は、まるで化石のように美しい。歓声をあげて、ぼくは同室に泊ま